

授業科目名	理学療法概論	実施時期	1年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	2単位 30時間
担当者名	田中 勝（理学療法士）		
【授業の概要・目的】 ・理学療法とは何かを理解し理学療法士に求められている役割についてグループワークを通して学んでいく。			
【到達目標】 ・理学療法の概念、定義、方法および理学療法士の業務を説明できる。 ・理学療法士の役割と業務に必要な情報と情報の取り扱いを説明できる。 ・自らが目指す理学療法士像を説明できる。			
回	学習内容		
1	理学療法士とは		
2	理学療法士の現状		
3	リハビリテーションと関連職種		
4	理学療法の方法Ⅰ		
5	理学療法の方法Ⅱ		
6	理学療法の対象の理解Ⅰ		
7	理学療法の対象の理解Ⅱ		
8	理学療法の実際		
9	理学療法士の倫理と適正Ⅰ		
10	理学療法士の倫理と適性Ⅱ		
11	理学療法に必要な研究法		
12	理学療法に関わる法令・制度		
13	理学療法の歴史と展望		
14	理学療法の安全管理		
15	理学療法士とは（まとめ）		
授業形態	講義	評価方法	筆記試験
教科書	『基礎理学療法概論』網本 和 監修／メジカルビュー社		
参考書			

授業科目名	研究法	実施時期	3年次 前期・後期
授業回数	90分×23回	単位・時間数	3単位 45時間
担当者名	酒井 吉仁（理学療法士）、他		
【授業の概要・目的】 本科目は、骨格筋系、呼吸器系、循環器系、神経系、感覚器系などの検査・測定機器の意義や操作方法を学び、研究を進めるための過程を理解して、卒業研究の計画書を作成することを目的とする。			
【到達目標】 1. 骨格筋系、呼吸器系、循環器系、神経系、感覚器系などの検査・測定機器の意義を理解して操作ができる。 2. 研究企画を理解して、自身の研究計画を他者に説明できる。 3. 卒業研究計画書を作成できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	概要		目的、方法、結果、考察
2,3,4	方法	測定	主な測定の意義を理解して模倣して使用できる
5,6		分析	尺度の特徴と主な統計量を理解して模倣して解析できる
7	研究企画	計画書の作成 文献検索と収集	テーマの発見と計画書の作成方法について理解する 文献検索と収集の目的と方法について理解する
8		発表	自身が企画した研究計画を共有する
9	研究演習	演習の概要	研究演習の目的・手順について理解する
10		研究の展開	主題の設定、研究背景の展開を体験する
11			関連文献の検索方法、読み方を体験する
12			計画の立案を体験する
13			研究方法の検討・選択を体験する
14,15			データ収集法・研究機器の選択・検討を体験する
16			データ分析・統計を体験する
17			文献を用いた結果の検証を体験する
18,19		論文作成方法	卒業研究計画書が作成できる
20,21		発表方法	発表用原稿、スライドを作成できる
22,23		発表	企画した研究計画を共有する
授業形態	講義、演習	評価方法	レポート（卒業研究計画書）、発表内容
方法・手順	前期（1～8回）は、研究を進めるための過程を学習し、自身の研究テーマを文献の検索・収集・整理を進める中で検討し、研究計画書を作成・発表する。後期（9～23回、夏期休暇を含む）は、1教員が約6名（2～3名1組）を担当するゼミ形式で行われる。4年生の卒業研究に参加して、研究活動を体験する。自身の研究企画を再検討し、研究計画書を作成・発表する。		
教科書			
参考書	『PT・OTのための統計学入門』渡邊 宗孝 他／三輪書店		

授業科目名	臨床運動学	実施時期	2年次 後期	
授業回数	90分×30回	単位・時間数	4単位 60時間	
担当者名	布上 隆之（理学療法士）、他			
【授業の概要・目的】 これまで学んだ身体を構成する組織と器官の構造と機能の知識を元に、様々な疾病により生ずる障害がもたらす基本動作（運動）障害の病態やそのメカニズムを理解する。授業では症例ビデオを観察し、病態から生じる障害について分析、記録する過程を学ぶ。				
【到達目標】 ①理学療法による問題解決過程に必要な、動作観察・分析，運動観察・分析を行える。 ②問題解決を行うための論理的な思考ができる（病態・障害関連図を作成できる）。 ③情報を元に分析した内容を SOAP 形式で記録できる。				
回	学習項目	学習内容	行動目標	
1	疾病と障害	動作観察と動作分析	①観察した内容を客観的な情報として記録する	
2		運動観察	②動作を構成する運動に分解する	
3		運動分析：理学療法の対象となる疾病の病態と障害の理解（病態・障害関連図）	①疾病により生じる病態を説明する	
4			②身体各部の機能障害を説明する ③理学療法の対象となる疾病の病態と障害の関連図を作成する	
5	臨床推論 1 (変形性関節症)	ビデオ：症例の姿勢観察 ①姿勢観察	異常姿勢について観察し、記録する	
6		②姿勢分析	異常姿勢の原因となる機能・構造障害について仮説を説明する	
7		ビデオ：症例の歩行観察 ①動作観察	異常歩行について観察し、記録する	
8		②動作分析	歩行障害について実用性の観点から問題分析する	
9		③運動分析	歩行障害を構成する身体各部の運動障害について分析する	
10		④機能・構造分析	①運動障害に関連する機能・構造障害について仮説を説明する ②各機能・構造障害の関連について説明する	
11		⑤理学療法(評価)の選択	仮説を検証するための検査・測定方法を説明する	
12		⑥理学療法(治療)の選択	文献を用いて、問題解決に必要な治療方法を立案する	
13		臨床推論 2 (神経障害)	①症例の姿勢観察	異常姿勢について観察し、記録する
14			②症例の姿勢分析	異常姿勢の原因となる機能・構造障害について仮説を説明する
15				
16				

回	学習項目	学習内容	行動目標
17	臨床推論 2 (神経障害)	①症例の動作観察	異常動作について観察し、記録する
18		②症例の動作分析	異常動作の原因となる機能・構造障害について仮説を説明する
19			
20			
21			
22			
23	④機能・構造分析	①運動障害に関連する機能・構造障害について仮説を説明する ②各機能・構造障害の関連について説明する	
24	⑥理学療法(評価)の選択	仮説を検証するための検査・測定方法を説明する	
25	臨床推論 3 (腰痛症)	ビデオ：症例の姿勢観察 ① 姿勢観察、②姿勢分析	異常歩行について観察し、記録する
26		ビデオ：症例の歩行観察 ①動作観察、②動作分析	歩行障害について実用性の観点から問題を分析する
27		③運動分析	歩行障害を構成する身体各部の運動障害について分析する
28		④機能・構造分析	①運動障害に関連する機能・構造障害について仮説を説明する ②各機能・構造障害の関連について説明する
29		⑤理学療法(評価)の選択	仮説を検証するための検査・測定方法を説明する
30		⑥理学療法(治療)の選択	文献を用いて、問題解決に必要な治療方法を立案する
授業形態	講義、演習(グループワーク)	評価方法	筆記試験(ビデオ：症例の歩行観察・臨床推論)
教科書	『基礎運動学』中村 隆一 他/医歯薬出版 『運動療法大全 I 基礎編』黒澤 和生 監修/ガイアブックス		
参考書	『機能障害科学入門』千住 秀明 監修/神陵文庫		

授業科目名	専門書講読	実施時期	1年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	2単位 30時間
担当者名	酒井 吉仁（理学療法士：教育専門理学療法士）		
【授業の概要・目的】			
リハビリテーション医学という専門分野への入門として、専門書を読み、理解するための専門用語について調べる、検索するといった基本的な学習習慣を形成する。			
【到達目標】			
専門用語を調べて知る、専門書を読むことができる。また、自分の考えを他者に伝え、他者の考えを聞くことができる。知識、技術習得のための行動を自ら示し、学習作業に関して協業ができる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	リエンテーション	学習の進め方	学習の進め方について理解する
2	読解	言葉の定義	専門用語の定義について調べる
3			
4		文章の読解	文意について理解する
5			
6	記録	記録の仕方	文章で記録する
7			図を用いて記録する
8			表を用いて記録する
9			レポート形式にて記録する
10	発表	口頭発表	抄録を作成できる
11			スライドを作成できる
12			口頭にて発表できる
13			ディスカッションできる
14	演習	症例報告読解	読み取り(予習), 討論, 記録を行う
15		卒業研究抄録読解	読み取り(予習), 討論, 記録を行う
授業形態	講義、演習	評価方法	レポート、発表を総合的に判定
教科書	『基礎運動学』中村 隆一 他/医歯薬出版		
参考書			

授業科目名	理学療法障害学	実施時期	2年次 前期
授業回数	90分×30回	単位・時間数	4単位 60時間
担当者名	26回：酒井 吉仁（理学療法士：運動器・スポーツ専門理学療法士） その他：田中 勝（理学療法士）、他		
【授業の概要・目的】 障害の基本的用語や種類について学ぶ。 障害の定義や病態生理と回復について学ぶ。			
【到達目標】 1. 障害の構造を理解し、ICF分類に基づき分類できる。 2. 理学療法の治療対象となる障害について理解し説明できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	総論	障害について	障害の構造を理解する
2		障害の捉え方	障害の把握、理学療法の過程における位置付けの理解
3		ICFに基づく分類	ICFに基づいて分類ができる
4			
5	機能障害の病態生理と回復	炎症	炎症の定義、病態生理について理解する
6		疼痛	疼痛の分類と病態生理、評価治療について理解する
7		骨の損傷	骨折の治癒過程を理解する
8		筋の損傷	筋の損傷と治癒過程を理解する
9		筋力低下	筋力低下の原因、評価治療について理解する 廃用性筋萎縮の発生と回復について理解する
10		靭帯、腱の損傷	靭帯・腱の損傷と治癒過程を理解する
11		関節可動域制限	拘縮、強直の発生機序と回復について理解する
12		末梢神経の損傷	末梢神経障害と治癒過程を理解する
13		中枢神経の損傷	中枢神経障害と治癒過程を理解する
14		感覚障害、自律神経障害	感覚障害と自律神経障害の病態と症状を理解する
15		筋トーン異常	筋トーン異常の発生機序と治療について理解する
16		協調運動障害	協調運動障害の発生機序と治療について理解する
17		意識障害	意識障害の発生機序と治療について理解する
18		高次脳機能障害	高次脳機能障害の発生機序と回復を理解する
19			

回	学習項目	学習内容	行動目標	
20	機能障害 の病態生 理と回復	認知機能低下	認知症の病態生理、評価、対応について理解する	
21		呼吸機能障害	呼吸器障害の発生機序と治療について理解する	
22		嚥下障害	嚥下障害の発生機序と治療について理解する	
23		排泄障害	排尿障害の発生機序と治療について理解する	
24		浮腫	浮腫の原因、病態生理を治療について理解する	
25				
26				
27	事例検討	骨関節疾患例の I C F	代表的な骨関節疾患の病態生理を I C F 分類に分類し理解を深める	
28				
29		神経疾患例の I C F		
30				
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験
教科書		『機能障害科学入門』千住 秀明 監修／神陵文庫		
参考書		『リハビリテーションビジュアルブック』 落合 慈之 監修／学研メディカル秀潤社 『アスレティックトレーナー専門科目テキスト4 リコンディショニング』公益財団法人日本スポーツ協会		

授業科目名	保健理学療法学	実施時期	3年次 後期
授業回数	90分×8回	単位・時間数	1単位 15時間
担当者名	酒井 吉仁（理学療法士：介護予防認定理学療法士） 田中 勝（理学療法士）、他		
【授業の概要・目的】 福祉、保険分野における理学療法士の役割について学ぶことを目的とする。			
【到達目標】 1. 医療保険、介護保険制度について理解し説明できる。 2. 介護予防における理学療法士の役割について理解し説明できる。 3. 増進における理学療法士の役割について理解し説明できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	公衆衛生	医療保険	医療保険制度における理学療法士の役割について理解する
2		介護保険	介護保険制度における理学療法士の役割について理解する
3		介護予防	認知機能を理解し予防プログラムについて理解する
4		介護予防	運動機能を把握し予防プログラムについて理解する
5		介護予防	介護予防評価の理論と方法を理解し、評価を体験する
6		健康増進	ウイメンズヘルスについて理解する
7		健康増進	メンタルヘルスケアについて理解する
8		健康増進	栄養と理学療法
授業形態	講義、演習	評価方法	レポート、授業への参加を総合的に判定
教科書	必要に応じ資料を配付		
参考書	適宜紹介する		

授業科目名	教育管理論	実施時期	3年次 後期	
授業回数	90分×8回	単位・時間数	1単位 15時間	
担当者名	酒井 吉仁（理学療法士：教育専門理学療法士）			
【授業の概要・目的】 理学療法士として求められる基本的な資質・能力を有し、生涯にわたり専門的知識・技術の向上と豊かな人間性を育み、チーム医療職の一員として、科学的根拠に基づいた治療を対象者に提供するための根幹である教育と学習、マネジメントについて学ぶ。				
【到達目標】 ①あらゆる年齢、健康・障害レベル、生活の場を持つ人びとの健康で自立した幸福な生活の実現に貢献することを誓うことができる。 ②対象者の尊厳を基軸とした理学療法の提供・発展に関わる素地を養う行動を理解する。 ③診療参加型臨床実習の理念とシステムについて理解する。 ④理学療法の職場管理において求められる管理業務の基本、臨床教育の基本を理解する。				
回	学習項目	学習内容	行動目標	
1	プロフェッショナルリズム	医療倫理と理学療法倫理	プロフェッショナリズムについて説明できる	
2		対象者中心の視点、コミュニケーション		
3		理学療法士の使命、役割と責務		
4	教育と学習	生涯学習と臨床教育	生涯学習と臨床教育について説明できる	
5				
6	マネジメント	水準と品質保証、マネジメント	理学療法士に必要なマネジメントについて説明できる	
7		リスク・セーフティマネジメント		
8		多職種連携、チームステップ		
授業形態		講義、演習	評価方法	レポート
教科書		資料を配付		
参考書		「臨床実習の手引き 第6版」日本理学療法士協会		

授業科目名	理学療法評価学 I	実施時期	1 年次 後期
授業回数	90 分×15 回	単位・時間数	1 単位 30 時間
担当者名	酒井 吉仁（理学療法士）、布上 隆之（理学療法士）		
【授業の概要・目的】 理学療法評価に必要な触診技術について演習を通じて学ぶ。 ＊筋骨格系の構造と機能で学んだ知識を活用する 単元ごとの行動目標を達成するために事前学習（触診練習）を行い、各单元内に触診技術の確認を受けられるように取り組む。			
【到達目標】 筋骨格系の構造と機能の知識を活用し、理学療法評価に必要な触診が実施できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	触診	触診の進め方	触診の目的と方法について調べ、説明する。
		触診技術	触診に必要な基礎技術を実施する。
2	身体計測	骨指標の触診	身体計測に必要な骨指標を調べ、触診する。
3			
4	関節可動域測定	関節の触診	関節可動域測定に必要な関節を調べ、触診する。
5		靭帯の触診	関節安定性に関与する靭帯を調べ、触診する。
6	MMT	上腕筋の触診	MMT に必要な上腕の筋を調べ、触診する。
7			
8		前腕・手指筋の触診	MMT に必要な前腕・手指の筋を調べ、触診する。
9			
10		大腿筋の触診	MMT に必要な大腿の筋を調べ、触診する。
11			
12		下腿筋の触診	MMT に必要な下腿の筋を調べ、触診する。
13		足部筋の触診	MMT に必要な足部の筋を調べ、触診する。
14	体幹筋の触診	MMT に必要な体幹の筋を調べ、触診する。	
15	脈拍測定	動脈の触診	脈拍測定に必要な末梢循環を調べ、動脈を触診する。
授業形態	演習	評価方法	実技試験
教科書	『理学療法評価法』中島 喜代彦、千住 秀明／神陵文庫 『新・徒手筋力検査法』津山 直一 訳／協同医書出版 『分冊 解剖学アトラス I 運動器』平田 幸男 訳／文光堂		
参考書	『機能解剖学的触診技術 上肢』、『機能解剖学的触診技術 下肢・体幹』 青木 隆明 監修／メジカルビュー社		

授業科目名	理学療法評価学Ⅱ	実施時期	2年次 前期・後期
授業回数	90分×45回	単位・時間数	3単位 90時間
担当者名	1～30回：布上 隆之（理学療法士） 31～45回：中村 拓人 （理学療法士、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー）		
【授業の概要・目的】 理学療法の基礎的な評価について学習する。また、それぞれの評価において、適切に検査・測定する技術、結果を解釈する力を身につける。			
【到達目標】 ・検査・測定技術の習得 ・結果を解釈し、評価するスキルの習得			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	評価総論	評価の目的	臨床活動の流れと評価の過程を理解する
2		検査・測定	障害像（ICF）から検査・測定の位置づけを理解する
3	バイタルサイン	BP・P・R測定	血圧・脈拍・呼吸測定の方法・記録法を理解する
4	身体計測	肢長・周径測定	肢長・周径計測手順を理解する
5	関節可動域測定	概要	関節可動域制限の分類、実施・記録方法を理解する
6		上肢・手指	各種測定の参考可動域角度、基本軸、移動軸、測定肢位および注意点を理解する
7			
8		下肢・体幹	
9			
10			
11	徒手筋力検査	概要	
12		頸部・体幹	各種測定・段階の肢位、抵抗・固定・触診部位、運動方向、代償運動の抑制について理解する
13		上肢	
14			
15			
16			
17		下肢・顔面	
18			
19			
20			
21	感覚検査	表在・深部感覚	感覚検査の概要を理解する
22		複合感覚	感覚検査の進め方・記録法を理解する
23	整形外科的検査	体幹	各種検査の肢位、実施方法、陽性徴候、臨床的意義について理解する
24			
25		上肢・下肢	
26			

回	学習項目	学習内容	行動目標
27	疼痛検査	問診	痛みの分類、実施・記録方法について理解する
28	パフォーマンステスト	バランス評価	TUG・BBS が理解できる
29	高次脳機能検査	失行・失認・失語	高次脳機能障害に対する損傷領域の確認、行動観察、評価バッテリーについて理解する
30			
31	関節可動域測定	技術確認及び演習	関節可動域測定法（参考可動域角度、基本軸、移動軸、測定肢位および注意点）に基づき実施し、記録できる
32			
33			
34			
35	筋力測定		筋力を徒手筋力検査法（段階、肢位、抵抗・固定・触診部位、運動方向、代償運動の抑制）や測定機器を用い評価し、記録できる
36			
37			
38			
39	形態の評価		形態測定、姿勢・身体アライメントの評価を実施し、記録できる
40			
41	整形外科的テスト	整形外科的テストを実施し、記録できる	
42			
43	感覚検査	感覚検査を実施し、記録できる	
44			
45	疼痛評価	疼痛評価を実施し、記録できる	
授業形態		講義、演習	評価方法 筆記試験、実技試験
教科書		『理学療法評価法』中島 喜代彦、千住 秀明／神陵文庫 『新・徒手筋力検査法』津山 直一 訳／協同医書出版 『PT 臨床評価ガイド』島 昌史／医学書院	
参考書		『標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学』 奈良 勲 監修／医学書院 『運動器の徒手検査法』福林 徹 編集／文光堂	

授業科目名	理学療法評価学Ⅲ	実施時期	2年次 前期・後期
授業回数	90分×45回	単位・時間数	3単位 90時間
担当者名	水口 且久（理学療法士）		
【授業の概要・目的】 神経疾患に対する理学療法における臨床場面で必要な理学療法評価に関する基本的な知識を習得する。理学療法評価を行なう上で必要な検査の基本技術について学修する。			
【到達目標】 知識：理学療法の基礎的な検査・測定について理解する。 技術：理学療法の基礎的な検査・測定が模倣できる。 態度：専門職として必要な基本的態度、習慣について行動規範を持ち行動できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	脳神経検査	脳神経検査概要	脳神経検査の概要を理解する
2		検査の進め方	脳神経検査の進め方、記録法を理解する
3		脳神経検査演習	脳神経検査を実施し、記録する
4			
5	筋緊張検査	筋緊張検査概要	筋緊張検査の概要を理解する
6		筋緊張検査演習	筋緊張検査の進め方・記録法を理解する
7			
8			
9	反射検査	反射検査概要	反射検査の概要を理解する
10		反射検査の進め方・記録法を理解する	
11		反射検査演習	深部腱反射・表在反射・病的反射検査を実施し、記録する
12			
13	協調性検査	協調性検査概要	協調性検査の概要を理解する
14		検査演習	協調性検査の進め方・記録法を理解する
15			
16			
17	運動発達検査 姿勢反応検査	運動発達検査概要	運動発達検査の概要を理解する
18		姿勢反応検査概要	姿勢反応検査の概要を理解する
19		姿勢反応検査演習	姿勢反応検査を実施し、記録する
20			

回	学習項目	学習内容	行動目標	
21	片麻痺機能 検査	SIAS 概要	SIAS の概要を理解する	
22		B/S 検査概要	B/S 検査の概要を理解する	
23		B/S 検査演習	B/S 検査の進め方	B/S 検査の進め方
24			B/S 検査の実施し記録する	
25		12 段階評価の概要	12 段階評価の概要	12 段階評価の概要を理解する
26			演習	12 段階評価の実施し、記録する
27 28				
29	知識整理	各種検査の進め方	オリエンテーション、対人技能、概要説明について理解する	
30		適用判断と留意点	各種検査の適応判断基準、検査目的、検査時の配慮点を整理し理解する	
31	脳神経系検査	講義・演習	脳神経系検査を実施し、記録する	
32		技術確認		
33	筋緊張検査	講義・演習	筋緊張検査を実施し、記録する	
34		技術確認		
35	反射検査	講義・演習	反射検査を実施し、記録する	
36		技術確認		
37	協調性検査	講義・演習	協調性検査を実施し、記録する	
38		技術確認		
39	姿勢反応検査	講義・演習	姿勢反応検査を実施し、記録する	
40		技術確認		
41	片麻痺機能検査	講義・演習	片麻痺機能検査を実施し、記録する	
42		技術確認		
43	まとめ	技術適用の留意点	評価技術適用の要点を理解する	
44		総合演習	評価行動を実施し確認する	
45				
授業形態	講義・演習	評価方法	筆記試験、実技試験	
教科書	『理学療法評価法』中島 喜代彦、千住 秀明／神陵文庫			
参考書	『標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学』奈良 勲 監修／医学書院			

授業科目名	運動療法学	実施時期	2年次 前期・後期
授業回数	90分×60回	単位・時間数	4単位 120時間
担当者名	1～21、30～33、44～60回：中村 拓人 (理学療法士、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー) 22～29回：酒井 吉仁 (理学療法士：運動器・スポーツ専門理学療法士) 34～43回：田中 勝 (理学療法士)		
【授業の概要・目的】 各種運動療法の基礎的理論とその方法について学習し、対象者に対して実践できる技能を習得する。			
【到達目標】 ・運動療法の基礎的知識の習得 ・運動療法実施のための基礎的技能の習得			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	概念と定義	運動療法の概念と定義	運動療法の概念を知る
2	運動生理 適応と禁忌	運動生理学的影響	運動生理学的影響を理解しまとめる
3		運動療法の適応と禁忌	運動療法の適応、禁忌事項を理解する
4	実施基準と 中止基準	実施・中止基準	運動療法・トレーニングの実施基準と中止基準について理解する
5	運動療法・ トレーニング の基礎	運動と筋収縮の種類	運動・筋収縮の種類を知る
6		トレーニング原理と原則	運動の方法、肢位、強度、頻度、回数、期間などの運動処方に必要な要素を理解する
7		負荷の設定・モニタリング	
8		運動連鎖	
9			
10	ピリオダイゼーション		
11	筋力増強運動	筋力増強の理論	筋力増強の原理と理論を理解する
12			運動処方の要素を理解する
13			
14		筋力増強運動の実際	実際の方法を実践し、回数、頻度、期間等の設定について理解する
15			
16			
17		筋力増強運動実習	筋力増強運動を実際に行うことができる
18			
19	トレーニング 各論	スプリント	様々なトレーニングの理論と実際を理解する
20		アジリティ	
21		エンデュランス	

回	学習項目	学習内容	行動目標
22	関節可動域運動	関節可動域の理論	関節可動域運動の目的と方法、適応・禁忌を理解する
23		関節拘縮、強直	
24		目的と方法、適応・禁忌	
25	関節可動域運動	関節包内の関節運動	関節包内組織に対する関節可動域運動を実施できる
26		関節包外の関節運動	関節包外組織に対する関節可動域運動を実施できる
27			
28			
29	構成運動	関節構成運動（他動・自動介助・自動運動）を実施できる	
30	運動療法機器	機器を利用した運動療法	運動療法機器の種類名称・使用方法を理解する
31	バランス運動	バランストレーニング	トレーニングの実際を理解する
32	神経筋再教育	神経筋再教育・神経生理学的アプローチ	神経筋再教育・神経生理学的アプローチの概念を把握し、促通や抑制について理解する
33	ストレッチング	各種ストレッチング	ストレッチングの実際を理解する
34	協調性改善運動	運動失調の概念	運動における協調性の要素を理解する 運動失調の病態、評価について理解する
35		運動失調に対する運動療法	運動失調に対する運動療法を理解する
36			
37			
38	水中運動療法	水中運動療法総論	浮力、静水圧、粘性抵抗等の物理的特性を把握し、水中運動での適応を理解する
39			
40	動作練習	基本動作	基本動作の流れや動作の特性を理解する
41		基本動作の練習・指導 疾患別対応	基本動作の実際として、自立と介助、疾患別動作練習の特性を理解する
42			
43			
44	歩行練習	正常歩行と歩行介助の基本	正常歩行の特性を確認し、適切な歩行介助ができる
45		歩行練習の方法、歩行補助具を用いた方法	基本的な支持、振り出し練習や杖、歩行器などを用いた歩行練習ができる
46			
47			
48		応用的歩行練習	部分荷重練習、応用歩行練習について理解し実施できる
49			
50	荷重練習	荷重練習・部分荷重練習	荷重練習・部分荷重練習の基礎を理解する
51			
52			
53			

回	学習項目	学習内容	行動目標	
54	高齢者への対応	高齢者の特性	高齢者の特性を理解し配慮することができる	
55		運動療法・トレーニングの実際		
56				
57		注意点、栄養摂取、ピリオダイゼーション		
58				
59	演習	運動療法・コンディショニング演習	模擬症例に対して、運動療法・コンディショニングを実施できる	
60				
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験、実技試験
教科書		『運動療法学』柳澤 健 編集/メジカルビュー 『運動療法大全 I 基礎編』黒澤 和生 監修/ガイアブックス		
参考書		『アスレティックトレーナー専門科目テキスト3 コンディショニング』 公益財団法人日本スポーツ協会		

授業科目名	物理療法学 I	実施時期	2 年次 後期
授業回数	90 分×15 回	単位・時間数	1 単位 30 時間
担当者名	徳田 裕 (理学療法士)		
【授業の概要・目的】 本科目は物理療法の治療対象となる疾病、障害を学ぶことを目的とする。また、温熱療法や寒冷療法の生理的効果について学ぶ。			
【到達目標】 1. 物理療法の定義、禁忌を説明できる 2. 機能障害について説明し適切なモダリティについて説明できる 3. 電気生理学的評価について説明できる 4. 温熱療法の生理的効果について説明できる 5. 寒冷療法の生理的効果について説明できる 6. 水の物理的特性について説明できる			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	総論	定義、種類、禁忌	物理療法の歴史、定義、禁忌について理解する
2	温熱療法	温熱の生理効果	熱、熱移動、生理的作用について理解する
3			
4	寒冷療法	寒冷の生理効果	寒冷療法の生理的作用について理解する
5			
6	水治療法	水の原理	水の物理的特性と生理的作用について理解する
7	電気生理学	電気生理学評価	EMG、CMAP、SEP、SD曲線について理解する
8			
9	疼痛	疼痛の原因、評価	疼痛の原因、評価を調べ、適切なモダリティを選択して発表する
10	炎症	炎症の原因、評価	炎症の原因、評価を調べ、適切なモダリティを選択して発表する
11	運動制限	拘縮の原因、評価	運動制限の原因、評価を調べ、適切なモダリティを選択して発表する
12	筋緊張異常	筋緊張異常の原因、評価	筋緊張異常の原因、評価を調べ、適切なモダリティを選択して発表する
13	演習	温熱療法	温熱刺激と血流速度、疼痛、軟部組織伸張性の変化について確認する
14		寒冷療法	寒冷刺激とSNAP、疼痛、皮膚温の変化について確認する
15		SD曲線	感覚、神経、筋、疼痛のSD曲線について確認する
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験
教科書	『物理療法学テキスト』細田 多穂 監修／南江堂		
参考書	『機能障害科学入門』千住 秀明 監修／神陵文庫		

授業科目名	物理療法学Ⅱ	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×30回	単位・時間数	2単位 60時間
担当者名	徳田 裕（理学療法士）		
【授業の概要・目的】 本科目は物理療法の全体像を俯瞰し、各治療に用いる機器の種類や使用例、また、その治療原理や生理学的作用／効果／リスク管理を理解したうえで、各機器の操作を操作することを目的とする。			
【到達目標】 1. 物理療法の種類や治療機器・治療原理を理解し説明できる。 2. 各物理療法の生理的作用・効果と治療目的を説明できる。 3. 各物理療法機器の特性と使用方法を説明できる。 4. 各物理療法を駆使し、臨床を想定して実践できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	温熱療法	温熱の生理効果	温熱療法の生理作用について理解する
2		ホットパックと パラフィン	ホットパック、パラフィンの適応、禁忌について理解する
3		極超短波と超短波	極超短波と超短波の適応、禁忌について理解する
4		超音波	超音波の適応、禁忌について理解する
5	寒冷療法	寒冷療法の生理効果	寒冷療法の分類、生理作用について理解する
6		寒冷療法各論	寒冷療法の適応、禁忌について理解する
7	水治療法	水の原理	水の物理的特性と生理作用について理解する
8		水治療法各論	水治療法の適応、禁忌について理解する
9	光線療法	光線療法の原理	光線療法の生理作用について理解する
10		赤外線、S L療法	赤外線の適応、禁忌について理解する
11		レーザー療法	レーザー療法の適応、禁忌について理解する
12		紫外線療法	紫外線の適応、禁忌について理解する
13	演習	温熱療法	温熱療法機器と光線療法機器を用い、効果判定を行う過程を体験する
14		光線療法	
15	電気療法	原理と生理的作用	電気刺激の基本事項、生理作用について理解する
16		経皮的電気刺激療法	TENSの適応、禁忌について理解する
17		治療・機能的電気刺激	TES、FESの適応、禁忌について理解する
18		創傷治癒への電気刺激	マイクロカレントの適応について理解する

回	学習項目	学習内容	行動目標	
19	牽引療法	牽引療法各論	牽引療法の生理作用、実際について理解する	
20		頸椎、腰椎牽引	頸椎、腰椎牽引の適応、禁忌について理解する	
21	その他	B F、C P M	B F、C P Mの適応、禁忌について理解する	
22		I P C、振動療法	I P C、振動療法の適応、禁忌について理解する	
23	演習	電気刺激療法	T E N S、T E Sを用い、効果判定を行う過程の体験	
24		その他	C P M、I P C等の物理療法機器を用い、効果判定を行う過程を体験する	
25	臨床思考	臨床思考過程 (Clinical Reasoning)	3事例を、問題解決型学習を通じ、グループで思考した内容を発表し検証する	
26				
27				
28				
29				
30				
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験、実技試験
教科書		『物理療法学テキスト』細田 多穂 監修／南江堂		
参考書		適宜紹介する		

授業科目名	義肢装具学	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×30回	単位・時間数	2単位 60時間
担当者名	田中 勝（理学療法士）、森田 忠浩（義肢装具士）		
【授業の概要・目的】 ・義肢および装具は、機能障害に起因する能力障害を最小限にとどめて、生活上の問題を解決する手段である。義肢および装具の有効な活用について学ぶ。			
【到達目標】 ・装具が適応となる疾患が説明できる。 ・切断者の原因、手術方法、術後管理が説明できる。 ・装具・義肢の使用目的、基本構造と部品、各部の名称を理解して、機能障害に適応した装具の選択および使用時の指導ができるようになる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	総論	装具学総論	装具の分類、処方、支給体系を理解する
2	靴型装具	靴の基本構造と補正	靴の基本構造と名称、補正の目的・方法を理解する
3	疾患別 装具	脳卒中片麻痺の装具	疾患特性に応じた装具の選択と各装具の基本構造と名称、作用機序、適応を理解する
4		対麻痺の装具	
5		整形外科的装具	
6		頸椎疾患・胸腰椎疾患	
7		末梢神経損傷の装具	
8		小児疾患の装具	
9	臨床事例	上肢装具	各装具の臨床での使用事例と制作上の注意事項について理解する
10		体幹装具	
11		下肢装具	
12			
13	装具採型	ギプス採型の実際	グループごとに実際のギプス採型を体験し、採型時の手順、注意事項を理解し、レポートを作成する
14			
15	総論	切断・義肢学総論	切断者の実態・切断原因・合併症・切断部位・切断手技（手術）を理解する

回	学習項目	学習内容	行動目標	
16	切断	術前評価・治療	術前の評価および治療内容を理解する	
17		術後評価・治療	術後評価および切断肢に対する治療内容を理解する	
18		術後の断端管理	術後の断端管理を理解する	
19	義足	大腿義足	種類と特徴、各部名称および各種膝継手・足継手の特性、アライメントを理解する	
20		下腿義足	種類と特徴、各部名称およびアライメントを理解し、調整できる	
21		股義足	股義足の各部名称とアライメントを理解する	
22	義足動作	義足装着練習	義足の装着から立位でのバランス練習を理解する	
23		歩行練習	歩行前練習と歩行練習の方法と要点を理解する	
24		歩行評価	異常歩行(ダイナミック・アライメント)の現象と原因、対応方法を理解する	
25	義肢の作成および使用	下腿義足	下腿義足の構造と採型およびメンテナンス	
26		下腿義足の実際	下腿切断者(モデル)による適合判定の実際を理解する	
27		大腿義足	大腿義足の構造と採型およびメンテナンス	
28		大腿義足の実際	大腿切断者(モデル)による適合判定の実際を理解する	
29		義足の調整	義足の作成に必要なアライメント設定・調整を理解する	
30		義手・その他	上腕義手・前腕義手の種類・構造を理解する 股義足、膝義足、特殊義足について理解する	
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験、レポート
教科書		『PT・OT ビジュアルテキスト 義肢・装具学』高田 治実 監修/羊土社		
参考書		『装具治療マニュアル』加倉井 周一 編/医歯薬出版 『装具学』石川 朗、他 編/中山書店 『義肢学』石川 朗、他 編/中山書店 『義肢学』澤村 誠志 編/医歯薬出版 『義肢装具学』川村 次郎、他 編/医学書院		

授業科目名	日常生活活動学 I	実施時期	1 年次 後期
授業回数	90 分×15 回	単位・時間数	1 単位 30 時間
担当者名	田中 勝 (理学療法士)		
【授業の概要・目的】 ・人の生活に必要な活動は何かを理解して、日常の生活に必要な活動を支援するために必要な考え方や活用できる機器の名称や使用法を学習する。			
【到達目標】 ・日常生活活動 (ADL) とは何かを説明できる。 ・ADL を支援するために必要な機器の名称や特徴、使用法を説明できる。 ・ADL 評価表の種類と特徴を理解して、評価場面での活用を説明できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	総論	ADL の概念と範囲	ADL の概念と範囲を理解する
2	基本動作	基本動作について	基本動作の定義を理解する
3		静的基本動作・動的 basic 動作	基本動作の名称と特徴を理解する
4	移動動作	複合動作指導	移動補助具の特性と適応、使用方法を理解する
5			車椅子の特性と適切な使用方法を理解する
6	生活支援	自助具および生活支援機器	日常生活活動の特性を理解して自助具や生活支援機器の使用目的・方法を理解する
7			
8			
9		コミュニケーション	コミュニケーションの意義と障害への対応を理解する
10	評価	ADL 評価について	ADL 評価の目的と各種評価の特徴を理解する
11	演習	ADL 評価方法の実際	ADL 評価時の要点を理解する
12		ADL と障害について	設定された機能障害が日常生活活動にどのように影響するか、実用性の観点から理解し、評価表を使用してレポートを作成する (学習目標④、⑤)
13			
14			
15	発表	ADL と障害について	演習内容を発表し情報を共有する
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験
教科書	『PT・OT ビジュアルテキスト ADL』柴 喜崇、他編/羊土社		
参考書	『日常生活活動 (ADL)』橋元 隆 編集代表/神陵文庫 『日常生活活動 (動作) - 評価と支援の実際 -』伊藤 利之 他/医歯薬出版 『ADL とその周辺 評価・指導・介護の実際』伊藤 利之 他編/医学書院		

授業科目名	日常生活活動学Ⅱ	実施時期	3年次 前期	
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間	
担当者名	田中 勝（理学療法士）			
【授業の概要・目的】 ・疾患により機能障害が生じて日常生活に支援が必要となった場合には、疾患特性に応じて効率的な支援を行う必要があるため、疾患特性に応じた生活支援を学習する。				
【到達目標】 ・機能障害と日常生活活動との関連性が説明できる。 ・疾患特性に応じた動作指導や環境整備を説明できる。				
回	学習項目	学習内容	行動目標	
1	総論	ADL 評価と動作観察	ADL 評価の特性を理解する	
2	動作観察	ADL 動作観察	基本動作の動作観察を理解する	
3			応用動作の動作観察を理解する	
4	疾患別 ADL 指導	中枢神経疾患患者への ADL 指導	脳血管疾患患者への ADL 指導を理解する	
5			脊髄損傷・四肢麻痺患者への ADL 指導を理解する	
6				脊髄損傷・対麻痺患者への ADL 指導を理解する
7			パーキンソン病患者への ADL 指導を理解する	
8				脳性麻痺患者への ADL 指導を理解する
9			神経筋疾患患者への ADL 指導	
10			骨関節疾患患者への ADL 指導	関節リウマチ患者への ADL 指導を理解する
11				人工関節全置換術・下肢骨折患者への ADL 指導を理解する
12			骨関節疾患・内部障害患者への ADL 指導	脊椎疾患・呼吸器疾患・心疾患患者への ADL 指導を理解する
13				認知症者への ADL 指導
14	まとめ	機能障害と ADL 指導	機能障害を踏まえた ADL 指導を理解する	
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験、実技試験
教科書		『PT・OT ビジュアルテキスト ADL』柴 喜崇、他編／羊土社		
参考書		『日常生活活動(ADL)』橋元 隆 編集代表／神陵文庫 『日常生活活動(動作)－評価と支援の実際－』伊藤 利之 他／医歯薬出版 『ADL とその周辺 評価・指導・介護の実際』伊藤 利之 他編／医学書院		

授業科目名	中枢神経系障害の理学療法 I	実施時期	3 年次 前期
授業回数	90 分×30 回	単位・時間数	2 単位 60 時間
担当者名	水口 且久 (理学療法士)		
【授業の概要・目的】 中枢神経疾患（脳血管障害等の神経疾患）の病態生理や障害特性を把握し、基本的な理学療法を実践するための知識と技術を学ぶ。			
【到達目標】 中枢神経疾患に対する理学療法に必要な基礎知識を理解し、基本的な評価及び治療が実施できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	障害特性	病態生理	脳血管障害の病態生理について理解する 画像診断、予後について知る
2		合併症	脳血管障害の合併症とその障害特性について理解する
3		治療	脳血管障害の医学的治療について知る
4		障害特性	中枢神経系の質的・量的障害特性を理解する
5		回復	中枢神経系の回復について理解する
6	評価と治療	中枢神経系障害の アプローチ	中枢神経系障害のアプローチの基本原則を理解する
7		評価	評価の要点を理解し、実施できる
8			
9		急性期の運動療法	ポジショニング、体位変換が実施できる
10			関節可動域運動、促通手技を理解し実施できる
11			座位、起立練習の方法を理解し、実施できる 高次脳機能障害等への対応を理解する
12		回復期の運動療法	障害特性に応じた運動療法を理解する 分離運動を促し、動作自立を促す基本的方法を理解し、実施できる
13			基本的な歩行・動作練習が実施できる
14	維持期の運動療法	機能維持のための指導方法を理解する	
15	装具療法	装具療法の適応	装具の適応についてその時期や種類について理解する

回	学習項目	学習内容	行動目標	
16	動作	動作練習の方法	片麻痺例の基本的動作方法を理解し、介助、指導、動作練習が実施できる	
17	歩行	歩行練習の方法	片麻痺例の基本的歩行練習の方法を理解し、指導、歩行練習が実施できる	
18				
19	事例検討	脳卒中片麻痺例の事例検討	片麻痺例（模擬患者）の検査測定、統合と解釈を実施できる	
20			片麻痺例（模擬患者）の理学療法計画を立案し、実施できる	
21	協調性障害	運動失調の理学療法	運動失調を伴う疾患の特性と対応を理解する	
22			事例をもとに模擬患者への理学療法を実施できる	
23	パーキンソン病	パーキンソン病の理学療法	パーキンソン病の特性と対応を理解する	
24			事例をもとに模擬患者への理学療法を実施できる	
25	多発性硬化症 筋萎縮性側索硬化症	多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症の理学療法	多発性硬化症の理学療法を知り、実施できる	
26			筋萎縮性側索硬化症の理学療法を知り、実施できる	
27	技術確認	技術確認	事例に対する適応技術の検討 中枢神経系障害（脳血管障害等）に対する運動療法技術の確認	
28				
29				
30				
授業形態		講義、演習	評価方法	筆記試験、実技試験
教科書		『神経筋障害理学療法学テキスト』細田 多穂 監修／南江堂 『目でみる脳卒中リハビリテーション』上田 敏／東京大学出版会		
参考書		『運動療法大全Ⅱ 実践編』黒澤和生 監修／ガイアブックス		

授業科目名	中枢神経系障害の理学療法Ⅱ	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間
担当者名	酒井 吉仁 (理学療法士)、他		
【授業の概要・目的】 本科目では、脊髄損傷の障害特性、基本的な理学療法の進め方について学ぶことを目的とする。			
【到達目標】 1. 脊髄損傷の障害特性が理解できる。 2. 脊髄損傷の評価と予後予測について理解できる。 3. 脊髄損傷に対する病期別の基本的な理学療法について理解・模倣できる。 4. 専門職として必要な基本的態度、習慣について自らの行動規範を持ち、行動できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1, 2	障害特性	完全麻痺と不全麻痺	完全麻痺と不全麻痺、脊髄ショックを理解する
3		合併症	呼吸障害、褥瘡、膀胱障害、直腸障害を理解する
4			自律神経障害、痙縮、変形、異所性骨化、末梢循環障害を理解する
5	評価	事例検討	ASIA (American Spinal Injury Association) の神経学的評価、Frankel の分類、Zancolli の上肢機能分類を理解する
6	治療	急性期の理学療法 事例検討	呼吸理学療法、関節可動域訓練、筋力増強訓練を理解・模倣できる
7			
8			
9			
10		回復期の理学療法	座位姿勢保持、寝返り、起き上がり、プッシュアップ、移乗動作の練習・指導方法を理解する
11			車いす駆動、歩行動作の練習・指導方法を理解する
12			食事、整容、更衣、入浴動作、自動車運転の練習・指導方法、環境制御装置の利用方法を理解する
13		技術演習	座位姿勢保持、寝返り、起き上がり、プッシュアップ、移乗、車いす駆動、歩行動作の練習・指導を模倣できる
14			
15			
授業形態		講義、演習、グループ学習	評価方法 筆記・実技試験
教科書		『脊髄損傷マニュアル リハビリテーション・マネージメント』 神奈川リハビリテーション病院「脊髄損傷マニュアル編集委員会」/医学書院	
参考書			

授業科目名	運動器障害の理学療法	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×30回	単位・時間数	2単位 60時間
担当者名	布上 隆之（運動器認定理学療法士）		
【授業の概要・目的】 代表的な運動器疾患の理学療法について学習し、対象者の問題解決のための論理的な思考能力の習得をはかる。			
【到達目標】 ・代表的な運動器疾患における評価・治療・効果判定・リスク管理について習得する。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	運動器疾患の障害像と疾患特性	2年次までの学習内容の振り返り	運動器障害の基礎知識を確認することができる
2			
3	大腿骨近位部骨折	大腿骨近位部骨折の病態、臨床所見、治療（手術、保存）と理学療法 <症例検討> 模擬患者への理学療法の見学・模倣・実施・立案	大腿骨近位部骨折の病態に応じた理学療法（評価・治療・効果判定・リスク管理）を理解できる 大腿骨近位部骨折の模擬患者に対する理学療法を模倣・実施できる。また立案できる。
4			
5			
6			
7			
8			
9	変形性膝関節症	変形性膝関節症の病態、臨床所見、治療（手術、保存）と理学療法 <症例検討> 模擬患者への理学療法の見学・模倣・実施・立案	変形性膝関節症の病態に応じた理学療法（評価・治療・効果判定・リスク管理）を理解できる 変形性膝関節症の模擬患者に対する理学療法を模倣・実施できる。また立案できる。
10			
11			
12			
13			
14	変形性股関節症	変形性股関節症の病態、臨床所見、治療（手術、保存）と理学療法 <症例検討> 模擬患者への理学療法の見学・模倣・実施・立案	変形性股関節症の病態に応じた理学療法（評価・治療・効果判定・リスク管理）を理解できる 変形性股関節症の模擬患者に対する理学療法を模倣・実施できる。また立案できる。
15			
16			
17			
18			
19	腰痛症 腰部疾患	腰痛症・腰部疾患の病態、臨床所見、治療（手術、保存）と理学療法 <症例検討> 模擬患者への理学療法の見学・模倣・実施・立案	腰痛症・腰部疾患の病態に応じた理学療法（評価・治療・効果判定・リスク管理）を理解できる 腰痛症・腰部疾患の模擬患者に対する理学療法を模倣・実施できる。また立案できる。
20			
21			
22			
23			

回	学習項目	学習内容	行動目標	
24	上肢の運動器疾患 〔肩関節周囲炎〕 〔橈骨遠位端骨折〕	上肢の運動器疾患の病態、臨床所見、治療（手術、保存）と理学療法	上肢の運動器疾患の病態に応じた理学療法（評価・治療・効果判定・リスク管理）を理解できる	
25		<症例検討> 模擬患者への理学療法の見学・模倣・実施・立案	上肢の運動器疾患の模擬患者に対する理学療法を模倣・実施できる。また立案できる。	
26				
27				
28				
29	まとめ	学習内容のまとめ	学習内容についてグループ内で確認し共有できる。	
30				
授業形態		講義、実技、グループワーク	評価方法	筆記試験、実技試験
教科書		『運動療法大全Ⅱ実践編』黒澤 和生 監修／ガイアブックス 『PT 臨床評価ガイド』嶋 昌史／医学書院 『標準理学療法学 専門分野 骨関節理学療法学』吉尾 雅春、他著／医学書院 『最新理学療法学講座 運動器理学療法学』木藤伸宏／医歯薬出版		
参考書		『理学療法評価法』千住 秀明 監修／神陵文庫 『運動療法に役立つ単純 X 線像の読み方』青木 隆明 監修／メジカルビュー		

授業科目名	内部障害の理学療法	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間
担当者名	滝田 正樹（理学療法士）、他		
【授業の概要・目的】 本科目では、内部障害にたいする理学療法を学ぶことを目的とする。			
【到達目標】 1. 呼吸器疾患に対する評価・治療について理解し呼吸理学療法を模倣できる 2. 循環器疾患に対する評価・治療について理解し運動処方ができる 3. 代謝疾患に対する評価・治療について理解し運動療法を実施できる			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	呼吸器疾患	呼吸生理	呼吸生理について理解する
2		血液ガス	血液ガスについて理解する
3		血液ガス	血液ガスについて理解する
4		病態生理	代表的な呼吸器疾患の病態生理を理解する
5		理学療法評価	代表的な呼吸器疾患の病態生理、評価を理解する
6		理学療法評価	代表的な呼吸器疾患評価を体験する
7		呼吸理学療法	代表的な呼吸器疾患の呼吸理学療法を理解する
8		呼吸理学療法	代表的な呼吸器疾患の呼吸理学療法を体験する
9	循環器疾患	循環器系 解剖・生理	循環器の解剖、生理について理解する
10			
11		病態生理	代表的な循環器疾患の病態生理を理解する
12		理学療法評価・治療	代表的な循環器疾患評価と理学療法を理解する
13	腎疾患	腎疾患の解剖生理、 腎障害	腎臓リハビリテーションについて理解する
14	代謝疾患	病態生理	代表的な代謝疾患の病態生理を理解する
15		理学療法評価、治療	代表的な代謝疾患の理学療法評価、治療を理解する
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験
教科書	『フィジカルアセスメント徹底ガイド 呼吸』 高橋 仁美、佐藤 一洋／中山書店		
参考書	適宜紹介する		

授業科目名	スポーツ理学療法	実施時期	1年次 後期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間
担当者名	1～11回：中村 拓人 (理学療法士、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー) 12～15回：梅野 晃 (理学療法士、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー)		
【授業の概要・目的】 理学療法士がスポーツに関わるうえで必要な基礎知識を学習する。また、自らがスポーツを行うことで、スポーツ動作への理解を深める。			
【到達目標】 ・スポーツ動作を理解する ・スポーツ障害・傷害の基礎知識、対応を習得する			
回	学 習 内 容		
1	スポーツを定義する		
2	スポーツとは（グループワークと発表）		
3	スポーツの価値とスポーツ権		
4	スポーツガバナンスとコンプライアンス		
5	スポーツ現場における暴力とハラスメント		
6	スポーツのインテグリティとアンチドーピング		
7	フェアなスポーツとは（グループワークと発表）		
8	スポーツ事故における法的責任（理学療法士、スポーツ指導者として）		
9	スポーツ仲裁		
10	スポーツ倫理		
11	理学療法士、スポーツ指導者としてスポーツに関わるためには（グループワークと発表）		
12	障がい者とスポーツとは、現状課題		
13	障がい者のスポーツ指導者の育成、障がい者スポーツに関わる理学療法士		
14	障がい者スポーツ演習 1		
15	障がい者スポーツ演習 2		
授業形態	講義、演習	評価方法	受講態度
教科書	『リファレンスブック』公益財団法人日本スポーツ協会		
参考書	なし		

授業科目名	発達障害の理学療法	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間
担当者名	大西 美穂（理学療法士）		
【授業の概要・目的】 正常運動発達と原始反射や姿勢制御反応などの神経系、運動器系の成長発達理論から、脳性麻痺、二分脊椎症、進行性筋ジストロフィー、ダウン症候群など運動発達の特有な障害を呈する代表的な疾患について学ぶ。			
【到達目標】 1. 発達障害の特性を理解し、評価・治療アプローチについて理解する。 2. 小児領域における理学療法士の役割を説明できる。 3. 専門職として必要な態度を身に付ける。			
回	学習内容		
1	正常運動発達		
2	正常姿勢反射と運動発達		
3	異常姿勢反射と運動発達障害		
4	脳性麻痺 1（総論、臨床像と評価）		
5	脳性麻痺 2（痙直型四肢麻痺）		
6	脳性麻痺 3（痙直型両麻痺）		
7	脳性麻痺 4（痙直型片麻痺）		
8	脳性麻痺 5（アテトーゼ型、まとめ）		
9	小児整形外科的疾患（二分脊椎など）		
10	知的障害児（ダウン症候群、発達障害など）		
11	小児遺伝性疾患 1（筋ジストロフィーなど）		
12	小児遺伝性疾患 2（ " ）		
13	重症心身障害児 1		
14	重症心身障害児 2		
15	小児呼吸機能障害		
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験、授業への参加度
教科書	『小児理学療法学テキスト』細田多穂 監修／南江堂		
参考書	『子どもの理学療法』井上 保 他編／三輪書店 『こどもの理学療法』田原 弘幸 編集代表／神陵文庫 『脳性まひ児の家庭療育』 Nancie R. Finnie 編著、梶浦一郎 他訳／医歯薬出版 『アテトーゼ・失調・低緊張の評価と治療』 Regi Boehme 著、調 誠也 他訳／協同医書出版		

授業科目名	理学療法技術論 I	実施時期	3 年次 前期
授業回数	90 分×15 回	単位・時間数	1 単位 30 時間
担当者名	酒井 吉仁 (理学療法士：教育専門理学療法士)		
【授業の概要・目的】 EBPT につながる基本として、理学療法士が行う検査測定結果から目標設定、理学療法プログラムの立案につながる臨床推論の基本的な過程を学ぶ。			
【到達目標】 ①臨床における問題解決に必要な理学療法評価・臨床推論の流れを理解する ②臨床的課題の問題解決過程を体験する。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	問題解決 シミュレーション	理学療法思考過程	理学療法による問題解決過程を説明する
2		問題発見 (情報分析)	問題発見のための情報分析過程を体験する
3		問題分析 (臨床的推論・思考的方法論)	問題分析方法を解説する
4		問題分析	問題分析過程を体験する
5		統合・解釈 (ICF 分類)	ICF を用いた問題整理方法を解説する
6		問題点リストの作成	問題点リスト作成過程を体験する
7		統合・解釈 (予後予測)	問題を統合・解釈する。根拠を示せる
8		目標設定	予後予測をもとに目標設定立案を体験する
9		問題解決 (問題志向型システム(POS))	問題解決手法を解説する
10		リハビリプログラムの立案	リハビリプログラム立案を体験する
11		問題解決 (応用行動分析学)	問題解決に必要な応用行動分析学を解説する
12		リハビリプログラムの立案	行動変容を目的としたリハビリプログラム立案を体験する
13	記録法	SOAP 法	SOAP 法について解説する
14	演習	臨床演習	臨床での理学療法(問題解決過程)を体験する
15			
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験及び症例レポート(カルテ記録)を総合的に判定して行う
教科書	『国際生活機能分類(ICF)国際障害分類』世界保健機関編／中央法規		
参考書	『理学療法ガイドライン』日本理学療法士協会監修／医学書院		

授業科目名	理学療法技術論Ⅱ	実施時期	3年次 後期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	1単位 30時間
担当者名	1～3回：酒井 吉仁（理学療法士：運動器・スポーツ専門理学療法士）、 4～15回：石黒 幸治（理学療法士）、他		
【授業の概要・目的】 臨床における専門的な理学療法技術の理論と実践的な適応について学ぶ。 救命救急の対応も含めて臨床における技術対応を学ぶ。			
【到達目標】 臨床における専門的な理学療法技術の理論と実践について学び、体験する。 専門職として必要な基本的態度、習慣について自ら行動規範を持ち、行動できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	リコンディショニング	各種エクササイズ	リコンディショニングで用いられる代表的手法を模倣できる
2		テーピング、インソール、物理的刺激	
3		徒手的アプローチ	
4	徒手療法	関節可動域障害に対する手技	関節モビライゼーションを模倣できる
5		筋性可動障害に対する手技	筋膜リリース手技などを模倣できる
6		筋・筋膜性障害に対する手技	スポーツマッサージ手技を模倣できる
7	がんリハ	がんのリハビリテーション	癌のリハビリテーションについて説明できる
8			
9	PNF	PNF 理論	PNF の概念と臨床への応用を説明できる
10		PNF 基本パターン	基本パターンと特殊手技を模倣できる
11	救命救急	救命処置	心肺蘇生を実施できる
12			AED の使用を実施できる
13	吸引	喀痰吸引手技	吸引手技を模倣できる
14			
15	徒手療法	リンパドレナージ	リンパドレナージを模倣できる
授業形態	講義、実習	評価方法	技能評価 (専門技能修得のための学習準備や 助言・指導・報告等の行動も含む)
教科書	資料配付		
参考書	『アスレティックトレーナー専門科目テキスト4 リコンディショニング』公益財団法人日本スポーツ協会		

授業科目名	生活環境論	実施時期	2年次 後期
授業回数	90分×15回	単位・時間	2単位 30時間
担当者名	田中 勝（理学療法士）		
【授業の概要・目的】			
・機能障害と生活障害との関連性を理解して、生活支援のための環境整備を学習する。			
【到達目標】			
・生活環境について説明できる。			
・生活環境における課題がどのように生じるか説明できる。			
・生活場面での問題を解決する環境整備について複数のプランを提示できる。			
・環境整備後のフォローアップの必要性を説明できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	生活環境	生活環境論・総論	生活環境の概念を理解する
2		リハビリテーションと生活環境	ADLとQOLの関係性を理解する
3		社会環境調査（演習）	社会環境調査が行える
4	家屋調査	地域環境を考える （社会環境調査発表・検討） 居住環境調査の目的および方法	居住環境調査の目的・方法を理解する
5	住宅改修	住宅改修に必要な知識および 福祉住環境コーディネーターについて	住宅の構造・関係法規の要点 を理解する
6			
7	事例検討 （演習）	居住環境調査（演習）	居住環境調査が行える
8		障害と居住環境の検討	8つの疾患別グループにて、模 擬患者を想定し、生活上の問題 点を挙げ改修案を検討する
9			
10	事例検討 （発表）	障害別居住環境調整の検討	グループごとに生活上の問題 点と改修案を提示し、必要な 予算を含めて発表を行う
11			
12			
13			
14	事例紹介	住宅改修の実際（外部講師：建築士）	住宅改修の現状を把握する
15	知識整理	障害特性と住宅改修について	住宅改修の要点を整理する
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験、レポート
教科書	『PT・OT ビジュアルテキスト 地域リハビリテーション学』 重森 健太 編／羊土社		
参考書	『生活環境論』木村 哲彦 監修／医歯薬出版 『標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学』 鶴見 隆正 編／医学書院 『バリアフリーの生活環境論』野村 みどり 編著／医歯薬出版 『最新版 テクニカルエイド』OT ジャーナル編集委員会 他／三輪書店		

授業科目名	地域理学療法学	実施時期	3年次 前期
授業回数	90分×15回	単位・時間数	2単位 30時間
担当者名	田中 勝（理学療法士）		
【授業の概要・目的】			
・高齢者や障害者が在宅で生活するための課題を理解して、生活の継続に必要な支援について学ぶ。また、生活支援に必要な知識や技術を理解する。			
【到達目標】			
・地域での生活支援における理学療法士の役割を説明できる。 ・生活環境や身体状況を評価し理学療法の目標を設定することができる。 ・生活環境や社会資源などの情報を整理して、生活支援の具体的方策を提示できる。			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	総論	地域理学療法総論	地域リハビリテーションの考え方と定義を理解する
2	関連法規	関連する制度と法規	医療保険や介護保険制度等の概要を理解する
3	生活環境	住環境と福祉用具	必要となる環境整備を理解する
4	リスク管理	地域におけるリスクマネジメント	在宅支援で必要なリスクマネジメントを理解する
5	地域リハビリテーション	地域リハビリテーションの過程	地域リハビリテーションの進め方を理解する
6	地域理学療法	地域理学療法の実際	訪問・通所・施設での理学療法の実践方法を理解する
7			
8			
9	介護保険	介護保険制度について	介護保険制度の目的と概要を理解する
10	事例検討 (演習)	事例設定	近隣に居住する学生にてグループを作成し、障害像と生活状況を設定する
11		ケアプラン作成	グループごとに模擬患者を設定し、生活上の問題点と対応方法、必要な費用を検討し、居宅サービス計画書を作成する。 また、リハビリテーション実施計画書も併せて作成し必要な予算を含めて発表を行う
12			
13			
14	ケアプラン発表	作成したケアプランの要点を発表する	
15	知識確認	在宅生活の支援	理学療法士が在宅生活を支援するために必要な知識を確認する
授業形態	講義、演習	評価方法	筆記試験、レポート
教科書	『PT・OT ビジュアルテキスト 地域リハビリテーション学』 重森 健太 編／羊土社		
参考書	『地域リハビリテーション原論』大田 仁史／医歯薬出版 『地域リハビリテーション論』大田 仁史 編著／三輪書店 『理学療法 MOOK13 QOLと理学療法』黒川 幸雄 編／三輪書店		

授業科目名	見学実習 (通所・訪問リハビリテーション)	実施時期	2年次 後期
担当者名	理学療法学科教員	単位・時間数	1単位 45時間
<p>【授業の概要・目的】 通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションにおける利用者への理学療法について見学を実施する。1週間の実習を通して、基本的な社会性、探求心、積極性を培い、地域における理学療法士の役割を理解することを目的とする。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 挨拶と状況に即した言葉づかいができる。 医療人としての身だしなみに心がけられる。 室内の整理整頓に心がけられる。 指導者に質問することができる。 必要に応じた相談・連絡・報告ができる。 理学療法士の仕事に興味関心を持つことができる。 分からないことを調べることができる。 PTの役割に気付くことができる。 対象者の話を聞くことができる。 対象者の諸問題に気付くことができる。 施設の運営方針・社会的役割を気付くことができる。 PTの理想像をイメージすることができる。 			
<p>学習内容</p> <p>見学実習の成果を期待するために下記の課題を設定している。なお、実習後にセミナーを開催し、実習で学んだこと感じたことを話し合い体験を整理し共有する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 実習日誌 毎日の到達目標チェックと見学内容及び感想を記載する。 実習施設の概要 施設の規模や地域における役割、職員数、設備、環境などを記載する。 見学実習の要約、その他 1週間の実習を通して、見学した内容、自身の成長と今後の課題について整理する。 			
授業形態	実習、セミナー	評価方法	実習における行動評価やセミナー等を総合的に評価
教科書			
参考資料	見学実習オリエンテーション資料、臨床実習報告書		

授業科目名	臨床演習	担当者名	理学療法学科教員
実施時期	3年次 後期	単位・時間数	1単位 30時間
<p>【授業の概要・目的】</p> <p>医療提供施設、介護保険施設などにおいて、理学療法学科教員の下で診療参加型の演習を実施する。臨床実習Ⅰに向けて、課題となる知識と技術を明確化するとともに、専門職としての必要な基本的態度、習慣について自らの行動規範を持ち行動できることを目的とする。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職業人としての習慣・態度をとることができる。 2. 理学療法の業務を理解できる。 3. 基本的な理学療法の実施過程を理解することができる。 4. 基本的な理学療法を模倣・実施することができる。 5. 理学療法観の育成することができる。 			
回	学習項目	学習内容	行動目標
1	臨床演習Ⅰ (見学)	実施過程を学ぶ	<p>Ⅰ. 職業人としての習慣・態度・業務理解</p> <p>社会人としての基本的マナーが守れる</p> <p>対象者との良好なコミュニケーションがとれる</p> <p>指導者との良好なコミュニケーションがとれる</p> <p>他職種との良好なコミュニケーションがとれる</p> <p>体調等の自己管理ができる</p> <p>職場の規則を守ることができる</p> <p>職場環境整備を意識した行動がとれる</p> <p>理学療法業務について理解している</p> <p>専門職としての成長・向上しようとする態度がとれる</p> <p>対象者との信頼関係を構築しようとする態度・行動がとれる</p> <p>指導者との信頼関係を構築しようとする態度・行動がとれる</p> <p>必要に応じた相談・連絡・報告ができる</p>
2		情報収集	
3		演習Ⅰ総括	
4	臨床演習Ⅱ (模倣)	PT技術の体験	
5		運動観察・分析	
6		演習Ⅱ総括	

回	学習項目	学習内容	行動目標
7	臨床演習Ⅲ (模倣)	PT技術の実施	Ⅱ. 基本的な理学療法の実施過程 1. 症例に即した評価の過程 処方や指示内容を正確に読み取ることができる 対象者に即した情報収集を実施できる 症例に即したリスク管理に必要な情報を確認できる 症例に即した評価項目を選択できる 評価に必要な事前の準備・確認ができる 評価時のオリエンテーションができる(説明と同意) 症例に即した検査・測定を実施できる 2. 症例に即した理学療法の治療・対応計画の立案 症例の問題点を(ICF分類に従って)挙げるができる 症例の問題解決への道筋を考えることができる 長期・短期治療目標を設定できる 理学療法目標に対する理学療法治療・対応計画を立案できる 3. 症例に即した理学療法の実施と経過 症例に即した基礎知識・臨床医学の知識確認ができる 理学療法実施に必要な事前の準備ができる オリエンテーションができる(説明と同意) 症例の安全性とリスク管理に配慮できる 症例に即した治療・対応ができる 必要に応じて治療・対応内容を調整・変更できる 症例に対応した経過記録を書き、その報告ができる
8			
9		演習Ⅲ総括	
10	臨床演習Ⅳ (実施)	PT技術の実施	Ⅲ. 理学療法観の育成 対象者の問題解決のために、能動的に理学療法の基本的な学習(「習得」・「活用」・「探究」)行動をとることができる
11			
12		演習Ⅳ総括	
13	臨床演習Ⅴ (実施)	PT技術の実施	
14			
15		演習Ⅴ総括	
演習方法 手順		1教員が5名の学生を担当するゼミ形式で行われる。2~3名1組で1症例の臨床過程を見学・模倣レベルで体験する。当該ゼミは臨床活動時間外の学習を含む。	
評価方法		臨床技能は行動評価とカルテ記録をもとに総合的に評価する。 基本的知識については筆記試験にて確認する。	
教科書		『国際生活機能分類(ICF)国際障害分類』世界保健機関編／中央法規	
参考書		臨床演習オリエンテーション資料、臨床実習報告書	

授業科目名	臨床実習 I	実施時期	3 年次 後期
担当者名	理学療法学科教員	単位・時間数	5 単位 225 時間
<p>【授業の概要・目的】 病院・診療所などの医療提供施設において、臨床実習指導者である理学療法士の下で診療参加型の実習を 2 施設にて各 3 週間実施する。社会的ニーズの多様化に対応した臨床的観察力・分析力を養うとともに、治療計画立案能力・実践能力を身につける。各障害、各病期、各年齢層を偏りなく対応できる能力を培う。また、チームの一員として連携の方法を習得し、責任と自覚を培う。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職業人としての習慣・態度をとることができる。 2. 理学療法の業務を理解できる。 3. 基本的な理学療法の実施過程を理解することができる。 4. 基本的な理学療法を模倣・実施することができる。 5. 理学療法観の育成することができる。 			
<p>学習内容</p> <p>各医療提供実習施設において、臨床実習指導者の指導のもとに偏りなく、各疾患の対象者について、身体的・心理的・社会的状況を十分理解し、基本的な理学療法を見学、模倣、実施する。各施設での臨床実習終了後の学内セミナーにおいて、自己の学習内容の確認、補足と他者との学習内容の共有をはかる。自己の学習内容の確認、補足は、1 教員担当 3～5 名程度のゼミで指導を受け行われる。他者との学習内容を共有する目的で、症例報告会、理学療法実演会が行われる。</p>			
授業形態	実習、セミナー	評価方法	実習日誌・SOAP・収集した資料などの成果物、OSCE 等をもとに総合的に評価する。
教科書			
参考資料	臨床実習オリエンテーション資料、臨床実習報告書		

授業科目名	臨床実習Ⅱ・Ⅲ	実施時期	4年次 前期
担当者名	理学療法学科教員	単位・時間数	各 6単位 270時間
<p>【授業の概要・目的】</p> <p>病院・診療所などの医療提供施設において、臨床実習指導者である理学療法士の下で診療参加型の実習をⅠ期 7週間実施する。社会的ニーズの多様化に対応した臨臨床的観察力・分析力を養うとともに、治療計画立案能力・実践能力を身につける。各障害、各病期、各年齢層を偏りなく対応できる能力を培う。また、チームの一員として連携の方法を習得し、責任と自覚を培う。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職業人としての習慣・態度をとることができる。 2. 理学療法の業務を理解できる。 3. 基本的な理学療法の実施過程を理解することができる。 4. 基本的な理学療法を模倣・実施することができる。 5. 理学療法観の育成することができる。 			
<p>学習内容</p> <p>各医療提供実習施設において、臨床実習指導者の指導のもとに偏りなく、各疾患の対象者について、身体的・心理的・社会的状況を十分理解し、基本的な理学療法を見学、模倣、実施する。各施設での臨床実習終了後、自己の学習内容の確認、補足と他者との学習内容の共有をはかる目的で、症例報告会が行われる。</p>			
授業形態	実習、セミナー		
評価方法	実習日誌・SOAP・収集した資料などの成果物（ポートフォリオ）、症例報告会等をもとに総合的に評価する。		
教科書			
参考資料	臨床実習オリエンテーション資料、臨床実習報告書		

授業科目名	臨床実習Ⅳ	実施時期	4年次 前期
担当者名	理学療法学科教員	単位・時間数	3単位 135時間
<p>【授業の概要・目的】 介護保険施設、老人福祉施設、身体障害者福祉施設などの施設において、臨床実習指導者である理学療法士の下で診療参加型の実習を4週間実施する。社会的ニーズの多様化に対応した臨臨床的観察力・分析力を養うとともに、治療計画立案能力・実践能力を身につける。各障害、各病期、各年齢層を偏りなく対応できる能力を培う。また、チームの一員として連携の方法を習得し、責任と自覚を培う。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職業人としての習慣・態度をとることができる。 2. 理学療法の業務を理解できる。 3. 基本的な理学療法の実施過程を理解することができる。 4. 基本的な理学療法を模倣・実施することができる。 5. 理学療法観の育成することができる。 			
<p>学習内容</p> <p>介護保険施設、老人福祉施設、身体障害者福祉施設などの実習施設において、臨床実習指導者の指導のもとに偏りなく、各障害を有する対象者について、身体的・心理的・社会的状況を十分理解し、基本的な理学療法を見学、模倣、実施する。</p> <p>各施設での臨床実習終了後の学内セミナーにおいて、自己の学習内容の確認、補足と他者との学習内容の共有をはかる目的で、実習報告会が行われる。</p>			
授業形態	実習、セミナー		
評価方法	実習日誌・SOAP・収集した資料などの成果物（ポートフォリオ）、実習報告会等を総合的に評価する。		
教科書			
参考資料	臨床実習オリエンテーション資料、臨床実習報告書		

授業科目名	卒業研究	実施時期	4年次 前期・後期
授業回数	90分×30回	単位・時間数	2単位 60時間
担当者名	理学療法学科教員（理学療法士）		
<p>【授業の概要・目的】</p> <p>本科目では、3年次で作成した研究計画書に基づいてデータ収集と解析を行い、得られた結果を考察し、理学療法への展開を学ぶことを目的とする。</p>			
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究の必要性について説明することができる。 2. 研究を進めるための過程を説明することができる。 3. 必要な文献の検索、抄読が行える。 4. 研究計画書を作成することができる。 5. 機器を使用し、研究に必要なデータを測定し、データの分析を行なうことができる。 6. 文献を用いた結果の検証を行うことができる。 7. 卒業研究論文を作成することができる。 8. 卒業研究発表を行うための準備ができ、適切に他者に内容を伝えることができる。 9. 対象者に対する人道的・倫理的な対応を行える。 10. 探求心を持ち問題解決に取り組み、能動的に学習を行うことができる。 11. 研究チームの一員として協調的に行動できる。 12. 時間管理ができ、計画的に研究を進めることができる。 13. 収集したデータを適切に管理、保管することができる。 			
<p>学習内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究計画書の作成 2. 文献検索・収集 3. 予備実験 4. 研究計画書の修正 5. データ測定・計測 6. データ解析 7. 文献を用いた結果の検証 8. 論文作成 9. 研究発表 			
授業形態	2～3名1組の学生を教員が担当して行われる。		
評価方法	卒業研究論文、発表内容		
教科書			
参考資料	『標準理学療法学 専門分野 理学療法研究法』内山 靖／医学書院 「卒業論文執筆規定」「卒業研究発表要領」		

授業科目名	理学療法ゼミⅠ	実施時期	1年次 前期・後期
	理学療法ゼミⅡ		2年次 前期・後期
	理学療法ゼミⅢ		3年次 前期
担当者名	酒井 吉仁 (理学療法士)	単位・時間数	2単位 30時間
	中村 拓人 (理学療法士)		2単位 30時間
	徳田 裕 (理学療法士) 田中 勝 (理学療法士) 布上 隆之 (理学療法士)		1単位 15時間
<p>【授業の概要・目的】 理学療法ゼミは、基本的な態度とコミュニケーションを培い、学習の復習や動機付けを図ることが目的である。学内外において、1～3年生により構成される少人数の集団で、理学療法に関連する演習を行う。教員と高学年の学生が指導的立場を担う。</p>			
<p>【到達目標】 知識：各年次で学習した知識を確認できる。 技術：各年次で学習した技術を確認できる。 態度：社会人に求められる基本的な態度とコミュニケーションをとることができる。 学生として成長・向上しようとする態度をとることができる。</p>			
<p>学習内容 (1) 理学療法評価、日常生活動作などの演習 (学内) (2) 施設やスポーツ現場等のリハビリテーションの見学、体験 (学外)</p>			
授業形態	演習		
評価方法	積極的な活動参加、協力、協調性について総合的に評価する。		
教科書			
参考資料			